4年生の底力見せつけろ!!

中大スポーツ CHUDAI SPORTS
12月20日 金曜日 令和6年(2024)
第186号
中央大学体育連盟機関紙
発行人 志水 恒太
編集人 関 拓斗
八王子市東中野742―1
電 話 042(674)2802

中スポ

箱根駅伝 逆襲だ

新紅の挑戦 最終章

溜池吉居白川〈終面〉大会展望〈2面〉1年生特集〈3面〉

ついに訪れた三大駅伝最終戦。3大会ぶりに予選会からの出場となる中大はチームスローガン「新紅の挑戦」を掲げ、佐野キャプテンを中心に1年間歩み続けてきた。全日本大学駅伝では流れに乗ることができず4大会ぶりにシード権を逃したが、MARCH対抗戦やロードレースで復調ぶりを示し、チーム目標である「箱根駅伝総合7位」に向けて足並みはそろった。1年間の集大成が幕を開ける。

箱根駅伝
往路=107・5キロ大手町～芦ノ湖
復路=109・6キロ芦ノ湖～大手町

浦田優斗 経4 YUTO URATA

昨年は6区を走り区間5位と切込隊長の役割を全うした。4年生としての意地とともに「チームを勢いづけたい」その思いを最後の箱根に懸ける。

2002年12月6日生 狭山台中―國學院久我山高

「力を自分らで証明」藤原監督コメント

―今年の注目選手は
「やっぱり1年生は勢い良いですから。岡田（開成・法1）と佐藤大介（文1）、あと田原琥太郎（文1）。この3人はゲームチェンジャーになり得る存在になると思うので、期待していますね」
―監督のプレッシャーは
「今年は逆に気楽に下克上という形で学生たちとはやっています。これがお前たちの力じゃないというのを自分らで証明していくんだということをずっと話をしていて、そこはあの子たちも分かってくれていて、僕らはこんなものじゃないというのはあまり表には出さないですけど、しっかりと秘めて走ってきてくれているのであの子たちらしいレースをさせてあげたいというのが一番ですね」

らーめん
にんにくや
Instagram: ninnikuyaseki
twitter: ninnikuya_h
応援してるぞ～!!

ご意見・ご感想はこちらから↓↓

ポーズを決める4年生たち（切り込み写真も）〈カメラ・大畠栞里〉

阿部陽樹 文4 HARUKI ABE

集大成の証明

1年時から3年連続で出走しチームを支えてきた。駅伝では苦しい走りが続いているが、最後の箱根路でリベンジを果たす。

2002年9月30日生 鴻南中―西京高

山平怜生 法4 REI YAMAHIRA

副主将の意地

MARCH対抗戦では自己ベストを更新し持ち前の安定感をアピール。一昨年からエントリーされるもいまだ出走はない最初で最後の箱根路へ。

2002年9月21日生 船岡中―仙台育英高

スタッフ陣の声

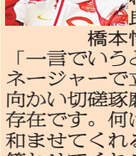
選手のどのような走りが見たいか

矢萩一揮学生コーチ（法4）
「ここまでの駅伝で力を発揮できない悔しさは、選手が一番感じています。悔し涙を流す選手や自責する選手たちを一番近くで見てきました。努力が報われて最後は笑顔で終われる、後悔のない走りをしてほしいです」

川田涼主務（経4）
「大学陸上界に『俺たちはこんなもんじゃないぜ☆』と見せつけるような走りをしてくれることを期待しています」

同期の4年生はどのような存在か

阿部朱音マネージャー（法4）
「『同期がいたから辞めずに頑張れた』そんな存在です。みんなすごく優しいんです。ひいき目なしに1番優しい学年です。ずっと助けてくれました。ありきたりな言葉では感謝を伝えきれないぐらい、この学年で良かったと感じています」



橋本怜南マネージャー（文4）
「一言でいうと『同志』です。選手とマネージャーで立場は違えど、同じ目標に向かい切磋琢磨（せっさたくま）できる存在です。何げない会話で和ませてくれる人、明るく笑わせてくれる人、辛いときに寄り添ってくれた人。心優しく温かい、そんな同期が私は大好きです」

チームの「輪」で変化

雪辱を果たす大舞台が迫る中、チームは本来の力を取り戻した。箱根駅伝予選会、全日本大学駅伝で力を発揮することができなかった悔しさをばねに、佐野拓実主将（経4）を中心としてチームは変化していた。ミーティングを週5日行うこともあり、下級生やコーチからの意見も求め、意見が出なくなるまでチームのあるべき姿を語り合った。その成果が目に見えたのが11月末に行われたMARCH対抗戦。吉居駿恭（法3）と本間颯（経2）が従来の中大記録を更新、多くの選手が自己ベストを更新するなど勢いを感じさせた。

「チーム全体はもちろん、4年生が結果を出したり、良い雰囲気で走れていたりする時がうれしい」と山平怜生副将（法4）の言葉通り、「輪」を作ったチームの空気は良い方向に流れ出した。佐野も「伝統校の主将」という肩書きに重圧を感じながらも「僕のことを一番理解してくれている」「一緒にやってきてよかった」と信頼を置く山平とともにチームをここまで引っ張ってきた。

上級生の作り上げた雰囲気のおかげか、上級生と下級生は例年以上に「風通しがいい」と阿部陽樹（文4）が言う。下級生がのびのびと競技に取り組むことで、上半期のトラックシーズンや男鹿駅伝では下級生が主体となり、チームは躍動した。

苦しんだ4年生も呼応

下級生の走りに4年生も呼応した。東海林宏一（経4）は東海大記録会の10000㍍で28分台を出すと、全日本大学駅伝では三大駅伝初出走を果たした。これまで共に練習を積んできた浦田優斗（経4）が東海林の活躍ぶりに対し「めちゃくちゃうれしかった」と喜びを語るように、入学してから長期にわたって苦しんでいた4年生がチームに勢いをつけた。「力のない世代と言われてきて、悔しい気持ちもある中でここまできた」と山平。上級生に掛かる期待と責任は想像よりも大きく、結果が常に求められる世界は負担が大きかった。それでも弱音を吐かず責任感やプレッシャーから逃げることなく駆け抜けた。

「新紅の挑戦」集大成

「仲の良さ」は指導陣も感じていた。藤原監督は「チームの導き方に正解はない」とした上で、仲の良さがチームにさまざまな影響を与えたと語る。上級生が指導するべき場面で遠慮や優しさが出てしまい、彼らへ厳しい言葉を掛けることもあった。求めたものは、駅伝を戦う上で重要な「泥くさく戦うこと」。その中で見えた甘さに対して追及し、改善に取り組んでいった。コロナ禍に入学し、スカウトができない状況の中で入部を決意し成長してきた4年生世代。佐野主将を中心に作り上げる「新紅の挑戦」の集大成が幕を開ける。（遠藤潤）

Center Position

幼い頃、「遊行寺」で観戦することが定番だった。進学した高校の最寄りのバス停は「権太坂」。正月の風物詩ともいえる箱根駅伝に魅了され、中大スポーツへ入部を決めた。最初は、駅伝を走る憧れの選手たちに話を聞けるという好奇心が全てだった。しかし次第に、「求められている存在なのか」と一歩離れて考える瞬間も増えていった。▼取材活動ともう一つ、思い出深いのが取材地での地域の人との会話だ。他愛もない話や、選手について質問を受けたり、逆に教えてもらったり。その度に、改めて、中大陸上部がどれほど多くの人々に応援されているのかを実感した。▼箱根駅伝を走ることができるのは、たったの10人。中大スポーツに入るまでは、その10人にしか目が向いていなかったと思う。しかしながら、取材に行けば行くほど、チーム全員が箱根駅伝に向かって本気で取り組んでいることを知った。過去の私のような人がいるのであれば、この事実を伝えたい。それが、私の中大スポーツで活動する原動力となった。▼今年の箱根号の表紙は4年生。学年は一つしか違わないが、自分の感情を紡ぐ姿、周りを思いやる姿を何度も目の当たりにした。そしてつい先日、4年生の方から、中大スポーツに温かい言葉かけていただいたことがあった。自分自身の3年間の活動を振り返り、「やってきてよかったんだ」と心の底から感じることができた。▼中大スポーツは、選手たちを同じ大学生という立場から取材し、拙くとも誠意を持って記事を書く、来月の箱根駅伝は、中大スポーツとしての最後の取材活動。一緒に活動し、数えきれないほど支えてくれた仲間とともに、選手たちの勇姿を、チームの思いを届ける。（二村）

ラーメン二郎
八王子野猿街道店2
アルバイト募集
新入生大歓迎
ラーメン食べ放題
部活会員募集
詳しくはDMで↓
@Jiro_Yaenkaido2

宮古島大学駅伝
WAIDO-ZUMI
2025年2月9日(日)開催
沖縄県宮古島市陸上競技場
AM9:00スタート！
大会情報は公式HPをご覧ください
出場大学
青山学院大学 / 神奈川大学 / 國學院大學 / 芝浦工業大学
順天堂大学 / 城西大学 / 専修大学 / 大東文化大学 / 中央大学
帝京大学 / 東海大学 / 東京国際大学 / 立教大学 / 早稲田大学
（50音順）

◆取材秘話◆ 戦隊ポーズでの集合写真をお願いしたところ、一番最初にポジションを決めたのは東海林選手。「みんな僕ここだからね！」と皆さんにアピールしていました
レイアウト 功刀萌恵